

HS01

踵骨骨折に対する観血的治療

Operative treatment of calcaneal fracture

みやもと たかし
宮本 俊之

長崎大学外傷センター

踵骨関節内骨折に対する観血的手術のメリットは陥没した後距踵関節面を直視下に整復固定できる点と内反した体部骨片や膨隆した外側壁を整復固定できる点にある。Sandersら(Journal of Orthopaedic Trauma 2014)は観血的に治療した踵骨関節内骨折の長期予後を報告し、Sanders type IIIの骨折の47%に、Sanders type IIでは19%に距踵関節固定術が必要であったと報告した。関節固定を行わなかった残りの症例の機能はADLに多少の支障をきたし、疼痛が軽度残る程度の治療効果が適切に手術できたら期待できると報告した。またCraigら(Journal of bone and joint Surgery 2009)は踵骨骨折後に距踵関節の固定術を行った際には初期に観血的治療を受けて、踵骨の形状と関節面を整復された症例の方が、初期に観血治療を受けなかった群より術後成績が良好であったと報告した。これらの報告から踵骨関節内骨折は予後が決して良い骨折ではなく、整形外科医にとってはチャレンジングな外傷であるが、手術を行う事で機能回復が期待でき、仮に外傷性の関節症変化を距踵関節に來したとしてもリカバリーが行いやすいということがいえる。

本レクチャーでは筆者が直接Roy Sanders先生に指導をうけた方法をお伝えしたい。要点は

- 1) 受傷時の骨折型の評価法、軟部組織の保護法
- 2) extended L-shaped lateral approach の実際
- 3) 整復内固定の手術手順およびコツ
- 4) 後療法

上記の4点について治療のアップデートを行いたい。